

〔三宅島特産園芸作物における生産振興技術対策〕
葉柄利用のためのアシタバ栽培管理技術の確立
～植栽間隔を変えた場合の収量と葉の形質変化～

長嶋大貴・石塚幹子
(島しょセ三宅)

【要 約】植栽間隔を短くすると粗収量が増加し、初期収量においては 10cm 間隔が最も優れる。植栽間隔を広くすると、葉柄径が大きくなるなど収穫葉の形質が変化するが、調整時のロス割合は変わらない。

【目 的】

アシタバの植栽間隔は、アシタバの収量・葉柄長などの品質に大きく影響するが、三宅島において最適な植栽間隔は明らかにされていない。そこで、植栽間隔を変えて栽培した場合の収量と収穫葉の特性を把握する。

【方 法】

1. 2017 年 11 月に育苗箱に播種し、12 月に 128 穴のプラグトレイに移植した苗を、2018 年 3 月 13 日に 2.4m×2.0m の試験区内に条間、株間を 10cm, 15cm, 20cm として植栽した。それぞれ植栽数は 96 株 (8 条×12 列), 150 株 (10 条×15 列), 322 株 (14 条×23 列) とした。施肥は 2 ヶ月に 1 回、化成 8 号 (N : P : K = 8 : 8 : 8) を 100 g / m² 施用した。遮光は黒色遮光ネット (遮光率 38%) を用いた。なお、各試験区は 2 連で設定した。
2. 収穫基準を、葉身の先端から葉柄基部まで 30cm 以上の未成熟葉とし、5 月 21 日から 11 月 12 日まで週 2 回収穫した。葉長や葉柄長、葉柄径などの形質を収穫葉全てを対象として、月に 2 回調査した。調整ロス割合は、収穫葉全体の重量のうち、30cm を超える葉柄部分の重量の割合として求めた。

【成果の概要】

1. 10cm 間隔で植栽した場合が最も粗収量が多くなったが、15cm 間隔、20cm 間隔の間では差は無かった (図 1)。
2. 植栽間隔を短くすると収穫葉長がやや長くなる傾向がみられたものの、差はそれほど大きくなく、30.0~34.5cm が約 40%, 35.0cm~39.5cm が約 40%, 40.0cm 以上が約 20% を占めた (図 2)。
3. 葉 1 枚あたりの調整重は、植栽間隔が広いほど大きくなった (図 3)。植栽間隔が広いほど葉柄径が大きくなっていることから、葉柄が太くなることから、1 枚あたり調整重が大きくなった要因と考えられる。
4. 30cm の出荷基準に合わせる際に葉柄部分をカットして生じるロス割合は時期によって異なり、5~6 月が最も大きく、7 月以降の高温でアシタバの生育が抑制される時期には小さくなった (図 4)。植栽間隔によってロス割合は変化しなかった。

【残された課題・成果の活用・留意点】

本試験は、定植後 8 ヶ月程度までの初期収量のみを調査したものであり、植栽間隔が長期的な収量に与える影響については継続的な調査が必要である。

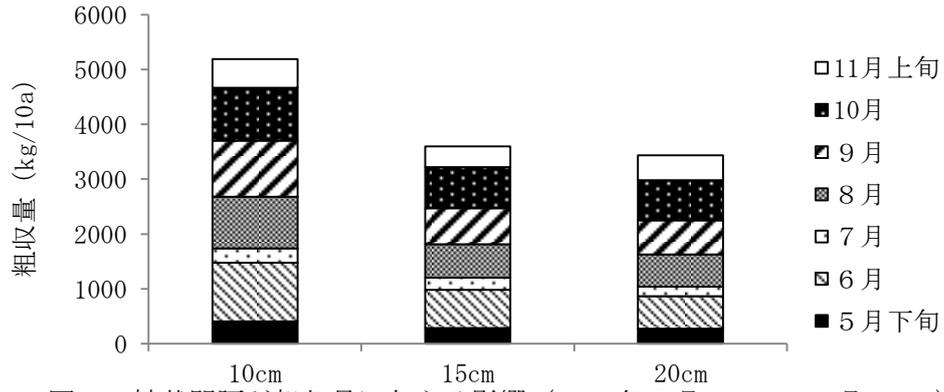


図1 植栽間隔が粗収量に与える影響 (2018年5月21日～11月12日)

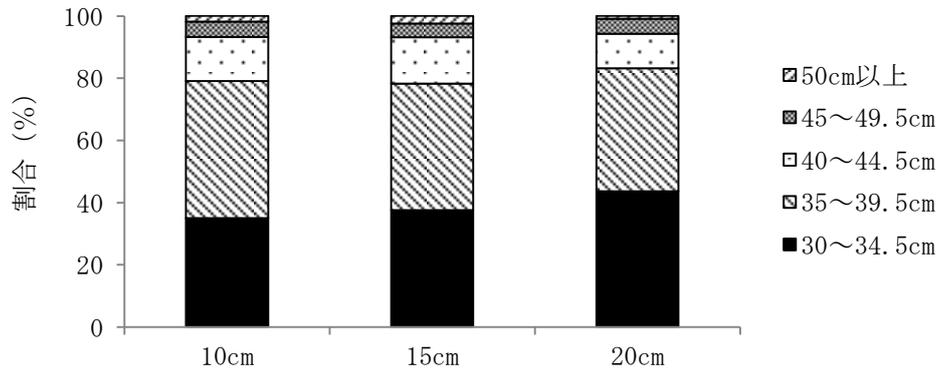


図2 植栽間隔と収穫葉長の関係

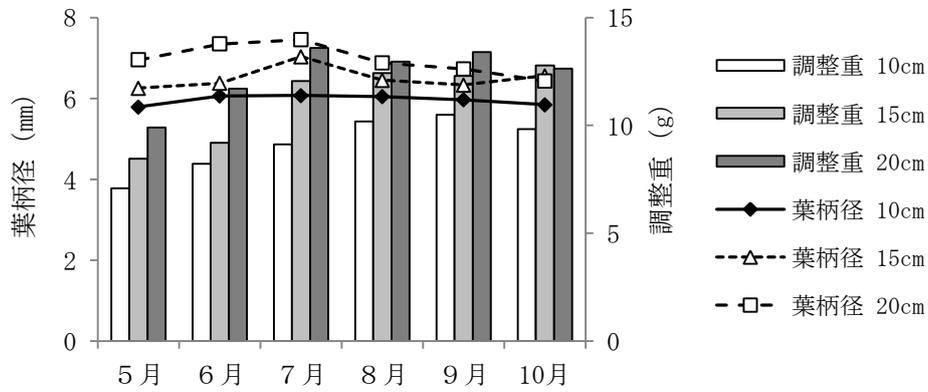


図3 植栽間隔と調整重および葉柄径の関係

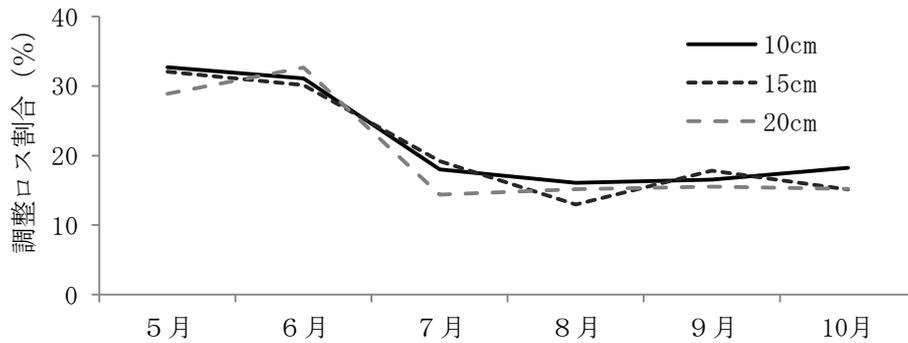


図4 植栽間隔が調整ロス割合に与える影響